

7月12日以来、南カフカスの教の影響を受けた生活が浸透し、アゼルバイジャンとアルメニアは軍事衝突を繰り返している。

エル・スミスの『世界神学をめぐる者もいる。トルコ系のイスラム教シーア派国家とアルメニア話』(中村廣治郎訳、明石書

歴史の文差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



教会の国家の対立と言いたいの(店)は、歴史家が抽象化に熱情だろ。原因は、領土問題は、抱くあまり、人間の宗教生活を低く見ることに警告を発して宗教に還元できるものではない。とはいえ、人間やその共同

い現実や、人間的な要素が会場だ。印象深いのは、「自分が他者にしてもらいたいと思うこと

を、他者にもせよ」というキリスト教徒の訓戒を引いていることだ。良質な宗教学者なら、他

2つのイスラムという視点

者の宗教的問題の理解に際して、自分自身にも適用できるか、少なくとも理解できる解釈原理や理論だけを示すべきだとい

なやり取りを無視し、両者の境界を必要以上に強く意識することに

してきた理想のイスラムと、ミスや私のような観察者が目にする現実のイスラムはしばしば違っていた。2つのイスラムは

「理想的なイスラム」の一潮流は、偉大な前者でなく日常の後者を手探りしながら時に挫折を繰り返して歴史を進んできた。理想的なイスラムも人と時代に

手がかりになるだろう。(やまうち まさゆき)